

令和元年5月30日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26293472

研究課題名(和文) 青年期発達障害者の性における対人教育プログラム開発に関する研究

研究課題名(英文) Research on sex education programs for adolescents with developmental disorders

研究代表者

宮原 春美 (MIYAHARA, Harumi)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・教授

研究者番号：00209933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,900,000円

研究成果の概要(和文)：支援者の認識に関する調査を行い、支援者は障害者の性に対して肯定的認識と否定的認識をもっており、障害者の性に関わるうえでの学習要望も多くあった。発達障害児に対する性における対人教育プログラムとして、小中学生用プログラム、青年期用プログラム、月経セルフケアプログラムを作成・実践し、現在支援者向けテキストと当事者向けのワークブックを作成中であり、2019年8月出版予定である。発達障害児・者に関わる専門家と保護者のための「長崎“障がい児・者の性を考える”教育研究会」を立ち上げ、対人関係教育プログラム講座、研修会等を開催して共同研究を推進し、ここでの成果をHPで広く社会に向けて発信している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、1) 我が国でほとんど研究されていない青年期発達障害児の性に関する対人関係教育プログラムの開発を目指して汎用化を図ること、2) 発達障害児に関わる専門職者のネットワーク作りを目指している事の2点である。

1) については、各年代に応じたプログラムを開発して実践・評価を行い、支援者や保護者のためのワークブックと当事者のためのマナーブックを作成中であり、2019年8月出版予定である。2) については、長崎“障がい児・者の性を考える”教育研究会を立ち上げ、支援者や保護者のための研修会、当事者のための講座を開催し、専門職者のネットワークを構築し、ここでの成果をHPで広く発信している。

研究成果の概要(英文)：We researched the perception of supporters. The results made it clear that supporters have both affirmative and negative perceptions toward the sexuality of persons with disabilities. We developed and implemented programs on elementary school, adolescence of children with developmental disorders. We are in the process of developing a textbook for supporters and a workbook for those with developmental disorders, with publication set for August 2019. In order to create a network to support the sexual development of children with developmental disorders, we have launched the Nagasaki Education Society for Studying Sexuality of Children and Persons with Disabilities, which is aimed toward specialists and guardians involved with children with developmental disorders. Here, we hold interpersonal education programs, workshops, and lectures, promoting joint research, with the achievements we make being publicly reported via our homepage.

研究分野：発達障害看護学

キーワード：発達障害者 青年期 性行動 性発達 対人関係プログラム 性教育 sexuality

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 , CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国においては発達障害児の性発達を支援するプログラムの開発およびその支援システムに関する研究・実践は殆どなされていない。

申請者はこれまで知的障害児や自閉症児・者の性教育の実施状況、保護者らの認識を調査し、保護者は我が子の性発達・性行動に戸惑いや葛藤を感じていること、学校や療育現場では必要性を認識しつつも系統的な性教育はほとんどなされていないことを報告している。さらに 2007-2009 年まで助成を受けてた挑戦的萌芽研究「発達障害児の性行動の実態と性教育の有用性に関する研究」では、自閉症児・者の保護者の認識と保護者から見た性発達、性行動の実態と問題行動の調査を行ない、自閉症児・者の性発達は生理的には定型発達児と変わらないことを確認しているが、その行動特性から来る性的問題行動に母親達は悩んでいることも明らかになった。

また 2011-2015 年まで助成を受けている基盤研究 C「発達障害児の性発達支援プログラム開発に関する研究」では、思春期にある発達障害児の性発達支援プログラムについて、小グループ活動によるプログラムと児童思春期外来における個別支援プログラムの開発を進めているところであり(宮原ら 2012)、その有用性がほぼ確認され今後その汎用化を図ることを目指している。この小グループ活動によるプログラムにはピア・エデュケーション(仲間教育)を応用しており、申請者はこのピア・エデュケーションを 20 年前から地域で実践している。2002-2004 年まで助成を受けた萌芽研究「思春期糖尿病患者の性行動の実態と性教育の有用性に関する研究」でピア・エデュケーションの有用性を検討し、発達障害児・者への応用可能性も確認した。

またわれわれは子どもや保護者に分かりやすく遺伝やひとの多様性・唯一性を伝えるための教育プログラムを開発・実践している。障がい児・者の支援にかかわる専門職者にとって、障がいは一つの個性であり、人は多様であることを共有する手段として、このプログラムも十分応用可能と考える。

2. 研究の目的

- (1) 性行動がより活発化する青年期発達障害者の性行動の実態を明らかにすること
- (2) 青年期発達障害者の性に関する対人教育プログラムを開発すること
- (3) 発達障害児・者の性に関する対人教育プログラムの汎用化を図ること
- (4) 発達障害児・者の性発達・支援に関わる専門家のネットワークを構築すること

3. 研究の方法

- (1) 国内外の実践活動・教材・プログラムに関する情報収集
- (2) 青年期発達障害者の性行動、認識に関する実態調査
- (3) 青年期発達障害児用性教育プログラムの分析・評価
- (4) 発達障害児・者の性発達・支援に関わる専門家を中心とした研究会を組織する

4. 研究成果

上記の研究目的別に成果をまとめる

- (1) 性行動がより活発化する青年期発達障害者の性行動の実態を明らかにすること

青年期発達障害者の性行動の実態

青年期発達障がい者の就労支援を行う福祉施設において、青年期にある発達障害者が性に関してどの程度知識や経験を持ち、どのように考えているのかに関して調査するために利用者 12 人の聞き取り調査を行った。その結果、彼らは我々の想像以上に性に関する知識があることが明らかになったが、それは単に用語を知っているだけであり、正しい知識不足が明確となった。また、福祉施設職員がこれまで把握していなかった性についての経験、性被害や性暴力などのネガティブな経験、メディアなどによる誤った認識があることがわかった。この調査結果は現在論文投稿準備中である。

青年期発達障がい者にかかわる機会が多い、福祉施設職員の障害者の性に対する認識とその関連要因などについて明らかにした。

長崎県内の障害者福祉施設 6 ヲ所で働く職員を対象に、集合法及び留め置き法による無記名自記式質問紙調査を実施した。その結果、251 人に実施し、有効回答は 238 人(94.8%)

であった。これらの職員分布はほぼ長崎県の各地域を網羅していた。福祉施設職員は、障害者の性に対して肯定的認識と否定的認識をもっていた。肯定的認識である「自慰行為の肯定」には専門学歴と性の責任性、「性的権利」には職種と障害者の性の学習経験、接触経験、性の責任性が関連因子であった。また、否定的認識である「性的関心への先入観」には一般学歴と性行動への対応経験、接触経験、性的寛容さ、「性行動の制限」と「性の衝動性」には一般学歴が関連因子であった。この結果をまとめ、現在学会誌に投稿中である。

青年期女性障がい者の月経教育プログラムの開発と評価に関する研究

青年期女性障がい者の月経状況を明らかにすること、さらに月経教育プログラムを開発・実施し、その前後において月経時の症状やセルフケア行動、作業効率や対人関係の変化を調査することで月経教育プログラムの評価を行なった、その結果、月経随伴症状の軽減、作業効率の向上、対人関係の軽快、セルフケア能力の向上等、対象者にとって良い効果をもたらした。プログラム受講後、対象者の約6割に月経随伴症状の軽減と対人関係の改善がみられ、5割に作業効率の向上がみられた。また、対象者の7割以上にセルフケアの向上がみられた。また受講後のインタビューで対象者ならびに施設職員における月経教育プログラムの満足感が高かった。本研究より、障がいのある女性における月経教育は、障がい者の特性や月経に関して専門的知識を持った専門職が介入する必要があることが示唆され、本研究成果は学会誌への投稿準備中である。

(2) 青年期発達障害者の性に関する対人教育プログラムを開発すること

放課後デイサービス利用者の中・高校生を対象にプログラム開発を行い実践した
就労支援を行っている福祉施設や特別支援学校高等部の青年期発達障害者を対象にプログラム開発を行い実践した。

上記プログラムと遺伝教育プログラムとの整理統合を図った。

(3) 発達障害児・者の性に関する対人教育プログラムの汎用化を図ること

(2) で開発したプログラムはHP、事務局通信でも公開しており、2019年度中にワークブック（支援者用と当事者用）として出版予定である。

(4) 発達障害児・者の性発達・支援に関わる専門家のネットワークを構築すること

2007年から障がい児・者対象の性教育講座を開催している。また性的加害行為や逸脱行動などで精神科児童思春期外来を受診した障がい児に対して、このプログラムを用いた個人セッションと保護者への看護面接を行ってきた。このため障がい児・者にかかわる専門職や保護者が一緒に語り合い、学びあう機会が必要と考え、2010年に長崎“障がい児・者”の性を考える教育研究会を発足させ、現在に至っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 20 件)

1) 吉田瑛美, 塩屋望, 片岡美希, 徳永瑛子, 宮原春美, 鶴崎俊哉, 岩永竜一郎: 自閉症スペクトラム症の子どもスクリーニングのための社会的認知検査の開発, 日本発達系作業療法学会誌. 6(1): 14-22, 2019 (査読有)

2) Kurasawa S, Tateyama K, Iwanaga R, Ohtoshi T, Nakatani K and Yokoi K. The Age at Diagnosis of Autism Spectrum Disorder in Children in Japan" International Journal of Pediatrics. e5374725. doi: 10.1155/2018/5374725. 2018. (査読有)

3) Kumazaki H, Okamoto M, Yoshimura Y, Ikeda T, Hasegawa C, Saito DN, Iwanaga R, Tomiyama S, An KM, Minabe Y, Kikuchi M.: Brief Report: Odour Awareness in Young Children with Autism Spect

- rum Disorders. J Autism Dev Disord. doi: 10.1007/s10803-018-3710-y. 2018. (IF=3.476) (査読有)
- 4) Tayama J, Yoshida Y, Iwanaga R, Tokunaga A, Tanaka G, Imamura A, Shimazu A, Shirabe S. Factors associated with preschool workers' willingness to continue working. Medicine (Baltimore). 97(49):e13530. 2018. (IF=2.028) (査読有)
- 5) 野田遥, 柳本舜, 長谷川隆史, 森内剛史, 徳永瑛子, 東登志夫, 岩永竜一郎: 体性感覚の処理・認識への開眼及び視覚的注意の影響についての研究. 日本作業療法研究学会雑誌. 21(2): 17-22, 2018 (査読有)
- 6) Nagae M, Tokunaga A, Morifuji K, Matsuzaki J, Ozawa H, Motoyama K, Honda S, Hanada H, Tanaka G, Nakane H; Efficacy of a group psychoeducation program focusing on the Attitudes towards medication of children and adolescents with ADHD and their parents: a pilot study, ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA, 62, 77-86, 2018 (査読有)
- 7) 佐々木規子, 中込さと子; 就学準備期から就学期の Prader-Willi 症候群児の保護者と担任間コミュニケーションの実態調査. 日本遺伝看護学会誌 16(2): 79-88. 2018. (査読有)
- 8) 森田真理子, 佐々木規子, 坪田幸子, 宮原春美: 脳性麻痺をもつ児の母親の産科医療補償制度に対する認識, 保健学研究, 30:47-52, 2017 (査読有)
- 9) 佐々木規子, 中込さと子: 就学準備期から就学期の Prader-Willi 症候群児の健康管理に関する記述研究. 日本遺伝看護学会誌 16(1): 49-58. 2017 (査読有)
- 10) 大迫健, 岩永裕人, 徳永瑛子, 田中悟郎, 菊池泰樹, 岩永竜一郎: 幼児をもつ母親の育児ストレスと関連要因. 日本発達系作業療法学会誌. 5(1): 1-8, 2017 (査読有)
- 11) 岩永竜一郎, 加藤寿宏, 伊藤祐子, 仙石泰仁, 徳永瑛子, 東恩納拓也, 櫻川亜衣, 上田茜: 学校版運動スキルアセスメントの因子分析研究, 日本発達系作業療法学会誌, 5(1): 15-23, 2017 (査読有)
- 12) 岩永竜一郎, 加藤寿宏, 伊藤祐子, 仙石泰仁, 徳永瑛子, 東恩納拓也, 櫻川亜衣, 上田茜: 学校版感覚処理アセスメントの因子分析研究, 日本発達系作業療法学会誌, 5(1): 9-14, 2017 (査読有)
- 13) 岩永竜一郎, 村田潤, 徳永瑛子, 田中律子, 東恩納拓也, 立石憲治: 重症心身障害児の関節可動性と情動・行動反応への揺動ベッドの効果について, 日本発達系作業療法学会誌, 5(1): 9-14, 2017. (査読有)
- 14) Higashionna T, Iwanaga R, Tokunaga A, Nakai A, Tanaka K, Nakane H, Tanaka G: Relationship between motor coordination, cognitive abilities, and academic achievement in Japanese children with neurodevelopmental disorders. Hong Kong Journal of Occupational Therapy, 30: 49-55, 2017 (IF=0.250) (査読有)
- 15) 次原詩乃, 佐々木規子, 宮原春美: 出産自己評価に影響を及ぼす要因, 保健学研究, 29: 9-16, 2017 査読有
- 16) 坪田幸子, 佐々木規子, 赤星衣美, 宮原春美: 長期入院した双子の母親の産後の経験と意思, 保健学研究, 29: 17-25, 2017 査読有
- 17) 佐々木規子, 森藤香奈子, 近藤達郎, 松本 正, 宮原春美: 長崎県内島嶼部の看護職の卒後遺伝教育に対するニーズ調査, 日本遺伝看護学会誌 15(1): 30, 2016 (査読有)
- 18) 佐々木規子, 森藤香奈子, 松本正, 宮原春美: 長崎県内島嶼部A市の保健師の遺伝相談の経験, 日本遺伝看護学会誌, Vol13(2): 75-82, 2015. 査読有
- 19) Morifuji K, Matsumoto T, Kondoh T, Nagae M, Sasaki N, Miyahara H, Honda S, Tanaka G, Moriuchi H, Nakane H: The relationship between physical signs of aging and social functions with Down syndrome in Japan, Acta Medica Nagasakiensia, 58:113-118, 2014 査読有
- 20) 佐々木規子, 森藤香奈子, 松本正, 宮原春美: 長崎大学公開講座「遺伝について楽しく学ぼう」の開催と評価, 保健学研究, 26, pp39-45, 2014 査読有

〔学会発表〕(計 22 件)

- 1) 森藤香奈子, 鹿田葵, 宮本大輔, 前田真実, 渡名喜海香子, 永井真理子, 佐々木規子, 宮原春美, 松本正, 近藤達郎: ダウン症者の生育記録に関する認識 障害基礎年金申請の保護者の振り返りを通して, 日本人類遺伝学会第 63 回大会, 日本人類遺伝学会第 63 回大会抄録集: 378, 2018 年
- 2) 渡名喜海香子, 森藤香奈子, 松本 正, 三浦清徳, 増崎英明, 宮原春美: NIPT を受検した夫婦の経験 NIPT を受検したこと, 遺伝カウンセリングへの思い . 第 17 回日本遺伝看護学会学術大会, 2018
- 3) 鹿田 葵, 宮本大輔, 前田真実, 佐々木規子, 宮原春美, 近藤達郎, 松本 正, 森藤香奈子: ダウン症者の障害基礎年金申請時に保護者が感じる困難感の構造. 第 17 回日本遺伝看護学会学術大会, 日本遺伝看護学会誌 17(1):41, 2018
- 4) 永井真理子, 森藤香奈子, 佐々木規子, 松本 正, 近藤達郎, 宮原春美: 出生後遺伝学的検査を受けた児の結果開示までの母親の経験 不安な気持ちを一人背負い込む母親に着目して-. 第 17 回日本遺伝看護学会学術大会, 2018
- 5) 永野明子, 佐々木規子, 森藤香奈子, 近藤達郎, 松本 正, 宮原春美: 長崎県における遺伝に関する認識調査-8 年前の調査と比較して-. 第 17 回日本遺伝看護学会学術大会, 52, 2018
- 6) 佐々木規子, 中込さと子: 就学準備期から就学中にある Prader-Willi 症候群の子どもと家族の生活マネジメントに関する記述研究. 第 41 回日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 2018
- 7) 松本正, 佐々木規子 : 多様性と唯一性を伝える市民に向けた遺伝教育. 日本遺伝看護学会第 17 回学術大会, 2018
- 8) 松竹ゆには, 宮原春美, 永橋美幸: 高校生における月経教育が月経痛に対するセルフケアの変容に与える効果, 第 31 回日本助産学会学術集会(京都), 2017
- 9) 森藤香奈子, 富永優奈, 新谷友望, 渡名喜美香子, 永野明子, 永井真理子, 佐々木規子, 宮原春美, 松本正: 大学生に向けた遺伝教育プログラムの開発 出生前診断に関する意思決定の学習ツール -, 日本人類遺伝学会第 62 回大会, 兵庫県神戸市 2017.11.17
- 10) 渡名喜海香子, 佐々木規子, 森藤香奈子, 松本正, 三浦清徳, 増崎英明, 宮原春美: NIPT を受検した夫婦の経験-NIPT 受検検討から結果開示まで-, 第 16 回日本遺伝看護学会学術大会, 宮崎市, 2017 .9 . 24
- 11) 森藤香奈子, 富永優奈, 新谷友望, 渡名喜美香子, 永野明子, 永井真理子, 川越明日香, 佐々木規子, 宮原春美, 松本正: 大学生に対する遺伝教育 - 出生前診断に対する意思決定の疑似体験を通して -, 第 16 回日本遺伝看護学会学術大会, 宮崎市, 2017.9.24
- 12) 佐々木規子, 原田菜実, 増元美咲, 永野明子, 渡名喜海香子, 永井真理子, 船本貴之, 森藤香奈子, 松本 正, 宮原春美. 幼児に対する遺伝教育プログラムの実施と評価. 【日本遺伝看護学第 16 回学術大会, 2017.9.23-24, 宮崎市
- 13) 森藤香奈子, 富永優奈, 新谷友望, 渡名喜美香子, 永野明子, 永井真理子, 佐々木規子, 宮原春美, 松本正; 大学生に向けた出生前診断に関する意思決定の学習プログラム. 第 24 回遺伝性疾患に関する出生前診断研究会, 久留米市 2017.9.9
- 14) 佐々木規子, 原田菜実, 増元美咲, 永野明子, 渡名喜海香子, 永井真理子, 船本貴之, 森藤香奈子, 松本 正, 宮原春美. 幼児に対する遺伝教育プログラム開発の試み. 第 41 回日本遺伝カウンセリング学会学術集会, 2017.6.23-25, 近畿大学(東大阪市)
- 15) 森藤香奈子, 佐々木規子, 宮原春美, 永野明子, 渡名喜海香子, 松本正, 近藤達郎: ダウン症児・者の家族が医療にきたいするもの, 第 15 回日本遺伝看護学会(新潟) 14(1):30, 2015
- 16) 森藤香奈子, 佐々木規子, 宮原春美, 松本 正; 子ども達のための遺伝教育「遺伝について楽しく学ぼう」~ 10 年間の振り返りと今後の課題 -. 第 62 回小児保健学会(長崎), 2015

- 17) 佐々木規子, 森藤香奈子, 松本正, 宮原春美: 遺伝学講座『遺伝について楽しく学ぼう』過去12年の取り組み. 日本遺伝カウンセリング学会(新潟), 2015
- 18) 佐々木規子, 森藤香奈子, 永野明子, 渡名喜海香子, 松本 正, 宮原春美: 遺伝教育プログラムの実践報告-小学校親子レクレーションでの開催-. 日本遺伝看護学会(新潟), 2015
- 19) 森藤香奈子, 佐々木規子, 宮原春美, 松本 正; 子ども達のための遺伝教育「遺伝について楽しく学ぼう」～10年間の振り返りと今後の課題～. 小児保健学会(長崎), 74, pp234, 2015
- 20) Yukiyo Nagai, Sachiko Tsubota, Noriko Sasaki, Harumi Miyahara: Relevant factors influencing menstruation in Femal University Students .The ICM Asia Pacific Regional Conference (Yokohama),2015
- 21) Sasaki N, Morifuji K, Matsumoto T, Miyahara H: A Practical Genetics Education Program for Preschoolers. The 11th ICM Asia Pacific Regional Conference (Yokohama), 2015.
- 22) Tsubota S, Sasaki N, Miyahara H: Study on the experiences of expectant mothers of twins about their long-term hospitalization. ICM 30th Triennial Congress (Prague) 2014.6.1-6.5

〔図書〕(計2 件)

- 1) 宮原春美: 第2章 発達障がい児・者の性発達と性教育, 月間作業療法ジャーナル増刊号, 三輪書店, 東京, p809-812, 2018
- 2) 宮原春美, 中根秀之: 第2章セクシュアリティと精神保健(太田保之他編著): 精神保健, 医歯薬出版株式会社, 東京, pp21-36, 2016

〔その他〕

ホームページ等: 長崎“障がい児・者の性を考える”教育研究会
2019.3.31までは <https://www.nagasaki-sexuality.org/>
2019.4.1より <http://sexuality.watson.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 岩永 竜一郎

ローマ字氏名: IWANAGA, Ryoichiro

所属研究機関名: 長崎大学 部局名: 医歯薬総合研究科(保健学科) 職名: 教授

研究者番号(8桁): 40305389

研究分担者氏名: 森藤 香奈子

ローマ字氏名: MORIFUJI, Kanako

所属研究機関名: 長崎大学 部局名: 医歯薬総合研究科(保健学科) 職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70404209

研究分担者氏名: 佐々木 規子

ローマ字氏名: SASAKI, Noriko

所属研究機関名: 長崎大学 部局名: 医歯薬総合研究科(保健学科) 職名: 助教

研究者番号(8桁): 90315268

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 相川 勝代, 東川 由貴

ローマ字氏名: AIKAWA, Katsuyo HIGASHIKAWA, Yuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。